



桃太郎

「昔ある処におじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。川上から大きな桃が一つ流れてきました。持って帰ってその桃を割ると、中からかわいい男の子が出て来ました。桃から生れたので桃太郎と名付けました。桃太郎はすくすくと成長して立派な若者になりました。ある日桃太郎は「これから鬼が島に鬼退治に行つて来ます」と申しました。おじいさんとおばあさんは日本一の黍団子を作つてお弁当を持たせ励ました。途中で犬・猿・雉・熊が黍団子を貰つて家来となりました。そして勇ましく鬼が島に乗り込み、悪い赤鬼・青鬼をさんさんに懲らしめました。鬼達は終に降参し、もう悪いことは致しませんと言つて自分達の宝物を全部差出しました。桃太郎は家来とともにその宝物を持つておじいさんとおばあさんの処へ帰りました。めでたし、めでたし。」

お手許に『古事記』「上つ巻(神代卷)」がございましたら参考にして頂ければ幸いです。おじいさんとおばあさんの名前を伊耶那岐神・伊耶那美神といいます。創造主であり、言霊の神のこともあります。おじいさんは山へ柴刈りに行きました。山とは八間(ヤマト)のことで、人間の創造意志の知性が現われる根本のリズム(ヒチシキミリイニの八つの父韻)のことで、柴刈りの柴とは霊の葉の謎で、昔言霊のことを一音で霊と呼びました。霊の言葉とは五十音の言霊を表わします。おばあさんは川で洗濯をしました。川の名を笠紫の日向の橋の小門の阿波岐原の川の瀬と言います。洗濯とは被禊(ハハネ)のことです。『古事記』参照。言霊の数は五十個、その五十個の言霊をどのように並べたら人間精神の理想構造(鏡)が出来るかの精神的操作手順が五十あり、この手順を被禊といえます。合わせて百の原理(百道・鏡餅)のことです。川から桃が流れて来るといふ事は、被禊によつて百(桃)の原理が完成するといふ意味であります。そこで、桃太郎の中から桃太郎が生まれました。

つまり、百個の原理を理解し、この言霊法則を運用する人が生れたということです。百個の人間生命の根本原理で人類の歴史を創造して行く実行者であります。『古事記』「黄泉国」の章に「伊耶那岐神命、桃子に詔りたまはく、汝吾を助けしがごと葦原の中つ国にあらゆる現しき青人草の苦き瀬に落ちて、患惚(たしな)まんに助けよと詔りたまひて、意富加牟豆美命」といふ名を賜ひき」とあります。梅若の狂言にある「桃太郎」は伝説の桃太郎のことで、その中でシテの桃太郎は自らを意富加牟豆美命と名乗ります。大いなる神の稜威の身という意味で、

阿波岐原

ワ	ア
	オ
	ウ
	エ
エ	イ
ニ	リ
ミ	キ
シ	チ
ヒ	ヒ

言靈の鏡（八咫鏡）に基づいて歴史を創造する神である天照大神（伊勢神宮の御祭神）の事を示しています。

桃太郎は健やかに成人し、やがて鬼が島を征伐しに行く。鬼の「オ」は言靈オのことで、物時の関連性（緒・尾）を調べる人間性能のこと、鬼の「ニ」はその関連性を学問として第二次的にまとめて行くことで、そこから科学・産業の世界が開いて来ます。それは『古事記』に示されている須佐男命の支配する世界であり、人類に素晴らしい便利な生活の道具（宝物）を実現しました。同時に権力闘争の道具に使われ、戦争による生命の危険、人心の荒廃、公害の発生等をももたらしました。何時までもこの宝物を鬼の独走の手に委しておくわけにはゆきません。天照大神の生命の原理の中に取り込まなければなりません。

おじいさんとおばあさんは黍団子を作って桃太郎に持たせました。黍とは伊耶那岐・美のことです。古事記の中で説かれますように岐美二神の結婚によって生れて来るのは、三十二の実相の単位である言靈子音であり、円満玲瓏な言靈の玉（団子）であります。五十個の言靈によって組織された人間精神神の完全体の鏡に照らし合わせることによって、初めて科学の成果を人類の福祉に奉仕させることが可能となります。

桃太郎から黍団子を貰った犬（言霊イ）、猿（言霊ウ）、雉（言霊オ）、そして熊（言霊ア）、が家来となりお供をしました（現在は熊が省略されています）。仏教で言えば仏陀に従う四天王のことです。この場合、桃太郎は原理（言霊イ）に基づいて言霊ウオア（欲望・経験知・感情）を自由に操作する実践者（言霊エ）に当たります。

かくて桃太郎は四天王を従えて鬼が島を征伐しました。物欲と権力闘争に明け暮れている世の中に姿を現わし、言霊の原理を高く掲げて世の矛盾を解消し、鬼が島の宝物である科学文明の利器が人類全体の幸福な生活に役立つ恒久平和の世界を実現させます。桃太郎の凱旋であります。めでたし、めでたしというわけであります。

以上、桃太郎のおとぎ話は現在の科学文明が完成に近づいた時、その科学文明が、数千年以前に発見され完成されている精神文明のエッセンスである言霊布斗麻邇の原理と共に車の両輪の如く相たずさえて人類の新しい第三の文明を創造する様相を予言した譬え話という事が出来るであります。

舌切り雀

むかし、むかし、ある処におじいさんとおばあさんがいました。その家の竹藪では雀が大勢集まって楽しく暮していました。ある日、おじいさんが家を留守にしました。その留守に雀がおばあさんの作った糊を食べたのです。おこったおばあさんは雀の舌を切ってしまいました。舌を切られた雀は泣きながら唐の竹藪に遂げて行き、そこでガヤガヤとしがない暮しを続けて行ったのです。時が過ぎました。やがておじいさんが雀のいる竹藪に久しぶりに訪ねて来ました。雀達は大喜びでおじいさんを歓迎し、ご馳走を出してもてなし、帰りにお土産にと軽い葛籠つづみと重い葛籠を出し、「お好きな方をお持ち下さい」と申しました。おじいさんは軽い葛籠をもらって帰りました。開けて見ますと、宝物が沢山出てきました。それを見たおばあさんは「私も……」と出掛けて行き、欲ばって重い葛籠をもらって帰りました。開けて見ると汚いものや妖怪が沢山飛び出して来ました、……と々。

スズメはイスズに通じている

雀という鳥は人の住む所を住家としています。お役人の政治に対する批判を「町の雀のさえずり」などということがありますが、そのように国と民・民衆の意味に譬えられます。「舌切雀」の雀の語源は鈴埋すずめめです。伊勢神宮のことを五十鈴の宮といいますが、鈴の形は人間の口の形をしており、鈴とは言葉を表徴します。特に五十鈴いすずといえますと、五十音の言霊の意味を表わしています。五十音の言霊とは、人間の心を構成している五十個の最小要素それぞれに五十音の清音を一つずつ当てはめたもので、心の最小単位である、と同時に言葉の最小単位でもある五十個ということです。

現代の日本人社会では全く知る由もありませんが、二千年前まで政治道德の基本でありました言霊の原理から見ますと、五十音言霊をそれぞれの魂の中に埋めていただき、五十音言霊をその実相に合わせて組合せた神の国の言葉である、古代大和言葉を使って生活しているのが日本の国民なのであります。そういう意味からいって、このおとぎ話の中のおじいさんとは昔の古代精神文明が華やかであった時代、五十音言霊の原理に基づいて政治を行っていた日本の天皇（スメラミコト）のことであり、おばあさんとは日本の政治家・学者・宗教家と理解することが適当でありましょう。古代の天皇（スメラミコト）の政治の下で日本の国民は楽しく何の不安もない生活を送ることができた時代があったのです。

なぜ、おじいさんがはじめに家を空けたのか

おじいさんが留守をした時、雀がおばあさんの作った糊を食べてしまいました。この短い文章は歴史的にまた哲学的に大層深い意味を含んでいます。まず、おじいさんが留守をした、ということです。それは言霊がそのまま物事の真実を示す五十音言霊の原理に基づいて、政治を行う責任者であった天皇（スメラミコト）がいなくなったことを謂っています。実際の歴史的事実としてこれに当たるのは、神倭朝第十代の崇神天皇によって三種の神器の同床共殿の制度が廃止されたことです。（これに関しては日本書紀崇神天皇の章に詳しく載っています。ご参照下さい。）その時まで天皇の政治の規範であった五十音言霊の原理（その原理を器物として表徴したものが三種の神器の中の八咫やたの鏡です。）を信仰の対象として伊勢神宮に神として祀ってしまい、その心理の実体を日本人の意識の表面から隠してしまった、ということでもあります。その時以来、日本人は次第に言霊の原理というものがこの日本を表徴する精神伝統であるということすら忘れてしまつようになりました。その時から日本（世界も同様）は弱肉強食の社会権力を持った者が栄え、力を持たない者が苦しむ精神的暗黒の時代が続くようになりました。

おばあさんの作った糊は何を意味しているか

次におばあさんは糊を作りました。昔の中国の老子という本の中に「大道廢れて仁義あり」という言葉があります。人間が人間の心とは如何なる構造をしており、その構造が示す行為の手順をしっかりと把握し理解しているならば、人として、国民として「こうしなさい、こうしてはいけない」と行為の基準を事細かに国家が規制する（仁義）必要はないはずです。大道である言霊の原理が世の中から隠されてしまった結果として、第二次的な手段が必要となり、おばあさんである歴代の政治家や学者・宗教家が国民の守るべき教えとして則法律（や教（教科書）・典（宗教經典）などを作ったこと）があります。

人間の生命の深奥の心理を把握し理解した人（聖＝靈知り）が存在すれば、社会には難解な法律など必要ありません。法律条文は簡単なほど生きた働きをするものです。人間の魂が曇ってくればくるほど、悪の行為を規制するために事細かに法律を作る必要が起つてくることとなります。実際にはおばあさんがそれらの則・教・典を作ったのではなく、印度・中国・朝鮮などから輸入したのです。儒教・仏教・それに時代が下ってはキリスト教などがそれに当たることを日本の歴史が教えてくれます。

雀はおばあさんの糊（教）を食べました。人々は生命の真理からみて二次・三次的な教えに基づいた社会の中に生活しなければならなくなり、その結果、上古の大和言葉の原理であった神の言葉が次第に話せなくなってしまうのです。日本国民は舌を切られ、外国からの借り物の考え方によって生きるより他に道はなくなつたのでした。泣く泣く唐（外国）の竹藪に逃げて行って、生存競争・弱肉強食の世の中で、しがない生活を送ることとなりました。現代までの日本人のことであります。

つづらの意味する秘密とは？

時がたち二千年の歳月が流れました。昔、雀が楽しく竹藪で遊ぶことができた時のおじいさんが久しぶりに雀を訪ねてきました。言霊の原理が社会の底流から、また人々の潜在意識の底から表面意識にまで復活し、その原理を自覚し保持して政治を行う人が国民の前に姿を現わしました。おじいさんを迎え雀達は大喜びをしてご馳走し、雀踊りを踊って歓迎しました。この雀踊りのことを古事記は天の岩戸の前での天の宇受売の命の神楽舞として伝えていきます。

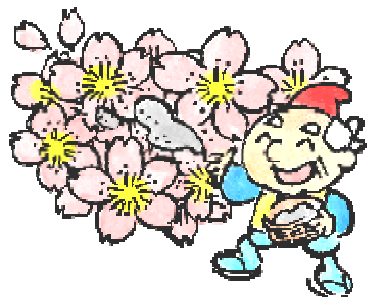
おじいさんは雀からお土産に軽い葛籠と重い葛籠のうち軽い葛籠の方をもらって帰りました。開けてみると宝物が沢山入っていました。それを見ていたおばあさんは「私も……」と出掛けて行って、おじいさんとは反対に重い葛籠の方をもらって帰ってきました。そして開けて見ますと、汚いものや恐ろしい妖怪が飛び出してきたのでした。

葛籠とは綴るといふことの謎です。言葉綴り合わせて社会的に世界的に文明を創造・運営して行くことを意味しています。軽い「つづら」とは言葉の一言一音が物事の実相を表わす最小単位である五十音の言霊そのものであり、一言が即真実でありますから、回りくどい解釈や概念説明を必要としません。そのため意見の衝突も起らず、人間の魂が歪むこともなく、自由自在に表現される軽やかな綴り（創造）であります。その葛籠を開けると（その創造力に則つてみると）人間生命の原理に基づいて物質文明を自由にコントロールして、人類に繁栄と平和と福祉をもたらす色々な方策（宝物）が現われてきます。

それに引きかえて重い「つづら」とは重苦しい学問知識の概念や希望的観測に基づく社会運営であり、考えれば考えるほど真実から遠ざかって行く学説や理論体系のことです。それを開けると、解釈の相違によって起こる紛争や戦争という厄介な汚物と化け物が飛び出てきます。この葛籠のことをギリシヤ神話ではパンドラの箱と呼んでいます。ゼウス（又はヘルメス）がプロメテウスに贈った禍いの箱です。その中には宗教的・哲学的・道徳的な概念理論がいつ

ばい詰まっっていて、一見それらは立派そうに見えるので、その内容に興味を持ってしまい、その理論に基づく社会創造を行うと、苦惱・混乱が果てしもなく続きます。

以上「舌切雀」のおじいさんおばあさんと雀のおとぎ話は、古事記の神話に示された天照大神の岩戸隠れと岩戸開きの内容について説明した物語なのであります。言霊の原理はいよいよ新世界創造の原器として、その姿を人類の前に現わす時が近づいています。



花咲爺

ある所に正直なおじいさんと欲張りのおじいさんがいました。正直なおじいさんの飼っている犬が裏の畑で「ワンワン」と鳴いて此処をれといっています。そこで掘ってみますと宝物がたくさん出てきました。それを見ていた欲張りじいさんは犬を無理に借りていき、犬の鳴く処を掘ると汚い臭いものがたくさん出てきました。欲張りおじいさんは怒って借りてきた犬を殺してしまいました。

悲しんだ正直じいさんは犬を丁寧に弔って地の中に埋め、そのあとに松の木を植えました。その松はずんずん大きく育ちました。正直じいさんはその松の木で臼を作り、餅をつきました。すると臼の中からまた宝物がたくさん出てきました。それを見ていた欲張りじいさんは臼を借りていき、餅をつきました。すると臼の中から汚いものがたくさん出てきました。欲張りじいさんは怒って臼を割って焼いてしまいました。正直じいさんはその灰を集め撒きますと、枯木に花が咲き、大層美しくなり、それを見たお殿様から褒められました。欲張りじいさんがまた真似をしてその灰を撒きますと、咲いていた美しい花も枯れ、人々の眼や鼻や口に入って苦しめましたのでお殿様からきつく叱られてしまいました……とさ。

この花咲爺のおとぎ話は、日本伝統の精神原理であるアイウエオ五十音言霊の学問と、ここ三千年来発達した物質科学的原理の研究とを対比させた物語とみることが出来ます。人間は精神宇宙の五つの界層次元に住んでいます。五つの次元を五つの母音で表わします。

ウは欲望の次元で、この次元から産業・経済活動が起こります。オの次元は経験知で、これより学問・科学が出てきます。アは感情の次元で、宗教・芸術が興ります。エは実践智の次元で、道徳的政治が現われます。最後のイの次元は人間の言葉の原理である五十音の言霊が存在するところです。以上の五つの次元を頭に入れておいて花咲爺のおとぎ話をみますと、たいへん示唆に富んだ物語であることがわかってきます。

五十音の言霊原理で登場人物をみてみると……

正直じいさんとは、言霊イ（言霊原理）とエ（その原理に基づく道徳）を操作活用する人、欲張りじいさんとは言霊ウ（産業・経済）とオ（経験科学）

を運営する人と解きます。正直じいさんの飼っていた犬とはイの奴ということ、イは五十音言霊の原理のことですから、イの奴とはその原理を操作・運用する人の意味となります。犬が鳴いた所を掘る、とは言霊原理に則って道徳の政治を行うという意味です。すると宝物が沢山出てきました、とは精神文化の花が咲き、平和で心豊かな社会が生れてきたということです。日本にも世界にも、三、四千年以前まではこのような精神文明の時代が実際に続いていたのでした。

しかし、魂が言霊のウとオという境涯に限定されて生きている欲張りじいさんがその次元段階の法則に従って物事を運営しますと、結局はその意に反して汚いものがたくさん現われてきます。言霊ウというのは欲望の世界であり、言霊オは経験知の世界です。その人達は物質面や自分の経験したことの知識だけでしか物事を判断し、行動することができません。社会全体とか、世界人類全体の福祉とかいう立場には余り重きが置かれません。個人の経験に基づく見解が集まるところには必ず意見の衝突が起こり、度を越えた競争が始まります。果てには大きな戦争さえ起こります。そのように精神的に、物質的にいろいろな禍が現われてきます。

今日の政治や経済や環境の状況がよい例であります。このように物質主義の偏重される時代がくると、精神的な原理である言霊布斗麻邇ふとまにの学問は国家社会からは忘れられていきました。言霊を操作する（イの奴ぬ）人、即ち犬は欲張りじいさんに殺されてしまいました。今日より約二千年以前第十代崇神天皇の時代のことです。正直じいさんと欲張りじいさんの対立はずうつと続きます。正直じいさんは殺された犬を丁寧に葬って埋め、その上に松の木を植えました。松が育って大きくなるつと、その木で臼を作って餅を搗きました。すると宝物がたくさん出てきました。松の葉はその元のところから二本に分かれています。一つの生命の内容を調べるには、まず陰陽二様に分けることから始まります。物事の真相はまず考える主体と考えられる客体に分かれて分析しなければなりません。松の葉の根元から葉が二本に分かれる形です。と同時に分析して内容が個々に確かめられたら、再びそれらを結合して元の姿に組立てることが大切です。分析と総合ができた時、初めて人はその物事の真相を全部は把握したことになります。松の葉の陰陽の分かれから、元の一つの根元に帰ることです。これを言霊の原理ではまつり（祭・政・真釣）と呼びます。

正直じいさんがついた鏡餅は精神理想体系の表われ

正直じいさんは右の分析と総合という方法を表わす松の木で、臼を作りました。

た。その臼で餅を搗きました。餅で上下二段の鏡餅ができます。人間の心を分析して五十個の言霊を手にしました。人間の心は五十個の言霊から構成されていることがわかります。この五十個の言霊が鏡餅の上段に当たります。その分析されてわかった要素の言霊を整理活用して、その総合の結果、政（まつりごと）の基準となる精神理想の体系が出来上がります。この整理・活用の方法がちょうど五十あります。この五十の整理法が鏡餅の下段に当たります。五十個の言霊とその整理の手順が五十、合計で百の原理、これを百の道で餅と呼びます。正月に床の間にお供えする鏡餅のことです。人間社会を運営して行く基準（鏡）となる百の道という意味の謎であります。臼はその鏡餅を搗く道具、即ち方法のことを指します。臼の語源の語につきましては長くなるので、ここでは省略します。鏡餅の上段である五十個の言霊を神としてお祭りした宮を伊勢の五十鈴の宮（伊勢神宮）といい、下段の整理法をお祭りした宮を奈良の石上神宮（五十神）と申します。

正直じいさんが臼で餅を搗きます。言い換えますと、言霊の原理によって政治を行いますと、人類全体の調和がとれた精神的な施策が次々に打ち出されてきます。宝物がざくざくと湧くように現われてきます。ところが反対に欲張りじいさんが真似て餅を搗きますと、物質的な利益を主眼にして、社会全体を無視した悪政と公害が地球上に現われてきます。臭い汚いものが湧き上がってきます。

おとぎ話が現在、そして未来を的確に予言する

欲張りじいさんは怒って臼を焼いてしまいました。正直じいさんは臼の灰を集めて枯れ木に撒いてやりました。そうしたら枯木の枝に美しい花が咲き出しました。「枯木に花を咲かせよう」と正直じいさんは村や町に美しい花を咲かせて歩きました。

この灰は葉霊で言葉と心、則ち言霊のことです。新聖書のヨハネ伝に「太初に言あり、言は神とともにあり、言は神なりき。この言はよろず太初に神とともにあり、萬のものこれによりて成り、成りたる物に一つとして之によりて成りたるはなし。之に生命あり。この生命は人の光なりき」と記されている言葉の言葉のことです。生命即言葉の法則のことです。

正直じいさんがその灰を撒くということは言霊の法則に基づいた種々の政策と施すことでもあります。この原理に基づいて物事を運びますと、三千年の暗黒の歴史の闇を破って再び蘇ってきた精神の原理と、今や完成に近づいている物質科学の原理の双方を給合した人類の第三文明の時代が実現し、この地球上に

今までになかった豊かな生活と恒久の平和がもたらされることになります。

これに反して、欲張りじいさんが灰を撒く、言い換えると言霊ウ（欲望）とオ（経験知）だけを操作して物質優先に偏った施策を行い続けていくならば、社会の生存競争はますます厳しくなり、人心は荒廃し、公害は増大し、地球上は生物の住む所ではなくなり、とどのつまり世界の核戦争という決定的破滅の事態を招くこととなります。おとぎ話にありますように花を枯らすばかりか、人間やすべての生物が絶滅してしまいます。

欲張りじいさんの撒く灰は放射能の「死の灰」を意味しています。「花咲爺」のおとぎ話の作者は実際にそのことを予想して書いたのでありましようか。現代という時点に立って見ますと、このおとぎ話は誠に恐ろしい的確な予言となつていているということができましよう。



浦島太郎

始皇帝は東方の五山にある不老不死の仙薬を求め、お気に入りの家臣除福という占師(方士)に童男童女大勢を与え、沢山の船を備え、何年かかっても東方の国にある「不老不死の仙薬」を見付けて持って来るようにと命令した。

「不老不死の仙薬」とは言霊布斗麻邇の原理に基づく政治は万世一系に変わる事のない恒久平和の世の実現を可能にするもの、アイウエオ五十音・三種の神器の原理である。このことから秦の始皇帝が秦朝を万代に安定させようとして求めたのである。だが、始皇帝が除福を来朝させた紀元前二百二十一年は、原理を隠して物質科学文明を興そうとする計画が実行に移される寸前の第七代孝霊天皇の時である。

「春の口の霞める時に住江の岸にて居て釣船のとほろつ見れば古の事ぞと念ほゆる水の江の浦島の児が鯉魚釣り……」(万葉集一七四〇)

浦島太郎は竜宮の乙姫はじめ大勢の人の歓迎もてなしを受けた。そして浦島は夢心地となり、宴会攻めの思わぬ三年を過ごした。そしていよいよ故郷に帰ることとなった。乙姫は竜宮城のお土産として玉手箱を、「決して開くことのないよう」と言いつつ浦島に与えた。

別れを惜しみながら再び亀の背に乗って故郷に帰って行った。しかし竜宮である日本の皇室は何事も無く浦島除福を送り返し、事態を乗り切る事が出来た事に胸をなで下ろした事である。物語には乙姫と浦島とはお互いに名残を惜しんだとあるが、実は全く反対のことを表すための皮肉の修飾である。

乙姫とは音秘めの謎である。上古の霊知り天皇のことをも意味する。人間の精神の構造を創造意志の法則として捉え、その実体を言葉の原理として把握し、それを秘め蔵(かく)している、の意味である。それ故竜宮城とは日本のことであり、又日本の当時の皇室のことでもある。当時中国は日本のことを東海の姫氏国とも呼んでいた。

玉手箱とは宝石を入れておく小さな箱のこと。玉とは言霊のことを言う。別名玉匣たまぐしげともいった。「この玉匣の言葉は「蓋」又は「明ける」の枕詞となった。まことに優雅な表現であるが、玉手箱の本来の意味は言霊の埴土はに札を入れる箱（ヘブライの神宝に黄金のMana壺とあるがこれと同じ）であり、それを開けば人間生命意志の構造をそのまま言葉として表わした人類永遠の真理が入っている。

神武天皇以後の世界文明経営の大方針によって、玉手箱は封印しておかなければならなかった。除福が来朝した時代は玉手箱の中に入るべき言葉の麻邇名を抜いた空っぽの箱でしかなかった。

百千たび浦島の児は帰るとも親姑射はこやの山はときなるべき（千載集）
常世辺に住むべきものを剣刀やわおのが行なからおそやこの君（万葉集）

初めの歌にあるはこやの山とは方壺山と列子にある日本の高千穂の峰のことである。浦島除福が幾度求めて来ても、言霊の原理は教えませんよ、ということである。次の万葉集の歌は先の浦島の児の歌の返歌として詠まれ、常世辺すなわち外国に住んでいればよいものを、判断力の根本原理を求めて日本にやって来て失敗した愚かな人よ、と除福を笑った歌ということが出来る。

除福が故郷に帰り着いた時は、彼の主人の秦の始皇帝はすでにこの世になく、浦島が竜宮で遊んでいた三年とは実は、それはそれは長い年月であったのだ。途方に暮れた浦島が開けてはならないと言われた玉手箱の蓋をとってみると、中から白い煙が立ち昇って中には何も入っていなかった。浦島はたちまち白髪の老人となってしまうた。

玉手箱の中身が何であったかを言霊学によって明らかにし、皇祖皇宗の世界経営の定めるように、二十世紀にその蓋が開かれ、不老不死の仙薬の言霊の原理に従って人類の新しい文明創造の歴史が始まるうとしている。